都道府県番号	４４
都道府県名	大分県

【特色あるフロンティアスクールの取り組み事例】

（①□　②☑　③☑）

Ⅰ．学校名及び規模

国東町立国東小学校（フロンティアスクール名）										
	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数	
学級数	2	2	2	2	2	2	1	１３	２１	
児童数	５７	５７	５２	４８	７４	４３	2	３３３		

Ⅱ．実践研究の概要（主題〈テーマ〉及び設定の趣旨

・主題（テーマ）

『自ら考え，自ら行動できる子どもの育成をめざして』

「ティーム・ティーチング（ＴＴ）指導による授業構想」

～算数科の問題解決的な学習過程における，きめ細かな支援（評価）のあり方～

・テーマ設定の趣旨

本校児童の具体的な学習場面で，

●自分の考えを持ったり，自分の考えに理由をつけて話したりすることが苦手である。

●じっくり粘り強く取り組めない。また，家庭学習などきちんとできない子がいる。

●学年があがるにつれ，学習への意欲や関心が薄らいでいる傾向が見受けられる。

など，基本的学習態度や基礎・基本の定着の不足が指摘されてきた。しかし，平成 14 年度から「少人数などきめ細かな指導に係る（ＴＴ）加配が 3 名に増員された。そこで，３名の加配教員を低・中・高の各学年部に配属し，学級担任と協力支援体制を組むことで，指摘されてきた課題の解消に向けて努力していくことにした

ＴＴ体制については，平成７年度から１名，平成１３年度には２名の加配を受け，ＴＴ指導を導入し，子ども一人ひとりに基本的な学習規律を身につけさせるとともに，成就感を味わうことのできる指導方法の工夫・改善に力を入れてきた。

教科については，系統的に積み重ねていく特性を持ち，学年が進むにつれ習熟の差がつきやすい算数科を取り上げ，児童の学習能力や個性の伸長を図るために，授業の質的改善，きめ細かな指導方法の工夫に努めていくことにした。

Ⅲ．実践研究の内容について

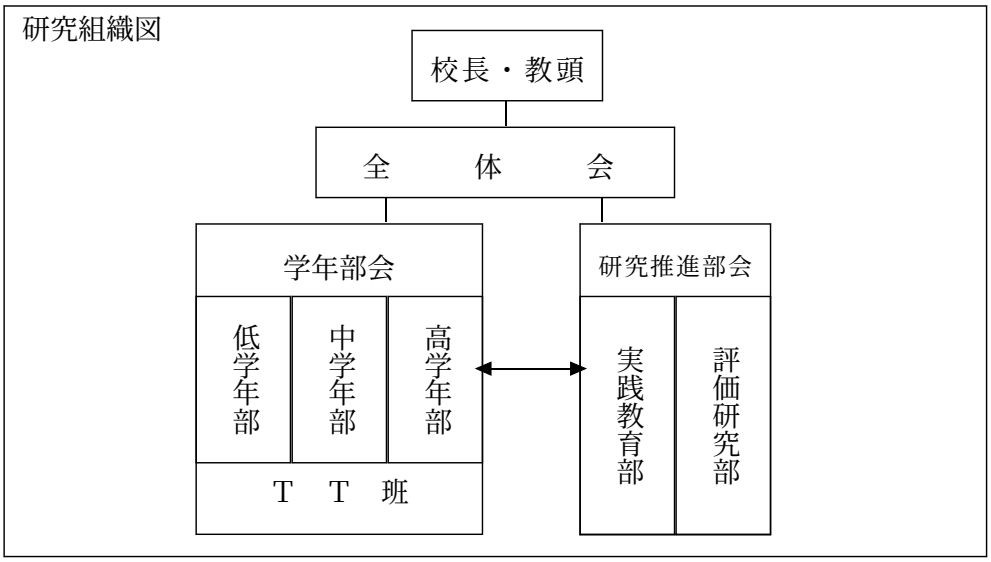
（ｉ）研究体制の工夫

学校経営（学年経営）にＴＴを導入し、管理職や養護教諭、事務職員を含む全ての教職員を低・中・高の３学年部に配置し、教職員一人ひとりの個性を生かし、教職員の協働体制を柔軟で有機的なものにしていくことを基本目標とする。

また、各学年部の横の連携を図るためのＴＴ班を組織し、単元ごとの指導計画の作成や効果的な学習形態の工夫などを研究していく。

さらに、研究推進部会を下記のように２部に分けそれぞれが主体的・専門的に研究をしてい

く。



（ⅱ）実践研究の内容

○仮　説…算数科の問題解決的な学習過程において、複数教師（ＴＴ）による指導体制で◇個に応じたきめ細かな支援（指導・援助）を行う。◇きめ細かな支援を行うための適切な評価を工夫・改善する。そうすれば、子どもが育つであろう。

○研究内容・方法

・指導方法の工夫改善　・評価を生かした指導の改善　・教材、評価基準等の研究や開発

□算数科の問題解決的な学習過程における協力的指導ＴＴと少人数指導ＴＳの位置づけ

＊単元全体の指導計画で

＊１単位時間での指導で

・「つかむ段階」及び「ふかめる段階」のＴＴ

・「さぐる段階」及び「ひろげる段階」のＴＳ

□評価を取り入れたＴＴの指導のあり方と教科学習を支える基礎学力の定着〔Ｋ１（興味読書）／Ｋ２（漢字）／Ｋ３（計算）タイムとＫ（国小）タイム＝〈補充〉の導入〕

＊「事前①・事中②・事後③の評価」と基礎学力補充のための「つまずき調査④と回復指導⑤」の評価

①事前評価（診断的評価）…単元導入の前に関連する既習内容の理解度を診断し、本単元の指導計画の作成資料にする。

②事中評価（形成的評価）…単元の学習途中における児童の理解状況を把握し、個別指導の方策を探る。

③事後評価（到達度評価）…本単元で学習した内容の定着度を見るとともに、評価規準に照らし合わせて個々の児童がどの程度目標に到達しているかを診断し、本単元の補充学習や次の学習への指導に生かす。

④つまずき調査…各学年ごとに精選した１０問の計算問題で既習内容の定着度を調べ、回復指導に生かしていく。実施時期（４月・７月・１０月）

⑤回復指導（１）…③の事後評価後の補充学習の他に、単元終了後２～３週間の間

隔を空け、水曜日の朝の時間を活用したＫ３タイムを全校で設定し、再度、定着度を調べ、補充学習に生かす。

（２）…つまずき調査で明らかとなった内容をＫ３タイムで使用する問題に立ち返り、補充学習で既習内容のふり返りを図る。

⑥総合評価 …年度末に各学年において評価テストを実施し、学習内容の定着状況を領域別、観点別にみるとともに、その結果を基に、指導方法の見直しを図る。　（次年度から実施予定）

（iii）成果と課題

○成果　・授業研究でも明らかになっているが、子どもの意識調査では、全学年において学習意欲の向上がみられた。また、学年部ごとには、以下のような成果が出ている。

（高学年）基礎計算力が向上し、他者の考えを取り入れ、自己の考えを広げたり深めたりするようになってきた。

（中学年）多様な考えをもてるようになってきた。

（低学年）基礎的事項・基本的内容の定着が顕著である。

・教職員間では、お互いの指導を見合ったり、取り入れたりすることで、指導力の向上や教材研究の深まりが見受けられた。また、教科指導の学年部間・学年間の交流が深まり、さらに、生徒指導面での情報交換などもできるなどの成果が出てきている。

・つまずき調査と回復指導では、次の成果があった。（６学年実施結果）

つまずき調査①	正答率			平均点		つまずき調査②	正答率
5年問題9小数の割り算（余り）	０％	⇒	Ｋ３タイム	７６点	⇒		７８％
〃　10小数の割り算（四捨五入）	５０％			７７点			８３％

○課題　・学年部会の中で、進度の調整や情報交換のための時間の確保が課題である。

・本年度、計算タイム（補充）用として、３５週分（×２種類＝同程度異問題）の計算問題を作り上げた。来年度はそれぞれの学年で計画にそった実践が求められている。併せて、つまずき調査を定期的に実施し、それぞれの学年のできるだけ早い時期での、回復指導をしていきたい。

・授業とＫ３タイムとをつなぐ、基礎的内容の定着度を確認するための問題を定期的に実施する予定であったが、問題の検討・精選に時間がかかり３学期のみの実施となった。来年度は、年度当初から実施し、授業とＫ３タイムのつながりが一層有機的になるよう努める必要がある。

（iv）成果の普及方策

①研究実践をまとめた紀要を他校や教育関係機関に配布したり、管内学校間連携推進地域連絡会で本校の実践を発表したりしながら、研究成果の普及を図る。

②校内授業研究会では、フロンティア指定校と連携したり、近隣の学校にも案内したりして、研究の深化・充実を図りたい。

（ｖ）その他